

同志社の神学とリベラリズム

1. シュライアマハーと私
 - 1) きっかけから展開へ
 - 2) 魅力—学びの醍醐味—
 - 3) 困難—拙い体験から—
 - ・コンマとピリオド/ ・指示代名詞/ ・ポーリング
 - ・用語の自由な使用
 - ・講義と公刊物
 - 4) にもかかわらずの魅力

2. 表題について—同志社の神学とリベラリズム—
リベラリズム wissenschaftliche Theologie
 - ・近代以降の学問性への敬意（人文知では歴史性への配慮）
 - ・人知を超えたものへのまなざし・志向性（歴史を超えたもの）
 - 1) 『基督教研究』
 - ・発刊は 1923 年
 - 2) 蘆田慶治
 - ・「発刊の辞」（1923 年 11 月、第 1 巻 1 号）
 - ・「第十巻を迎えて」（1932 年 10 月 1-2 号）
 - ・論文「基督教本質確立の問題」（第 1 巻、第 3 巻）
 - ・バルトの『ロマ書講解』研究会(1932 年春頃から自宅で)
 - 3) 大塚節治
 - ・論文「神学の性質の概観」（1923 年 11 月、第 1 巻 1 号）
 - ・「蘆田慶治先生を追想す」（1937 年 10 月、第 15 巻 1-2 号）
 - ・（発刊 20 周年における）「回顧と展望」（1942 年 10 月、第 15 巻 1-2 号）
 - 4) 実存的真理探究の精神
 - ・蘆田慶治に対して「みな先生の真理に対しての熱意からであったことを思います」
 - 5) リベラリズム
 - ・ 学問研究
 - ・ 教育

3. 感謝と今後
 - 1) 聖書
 - 2) シュライアマハーを学ぶことの継続
 - 3) 敬虔をめぐって—ことばとことば以前—
 - 4) 贖罪信仰・信仰義認とプロテスタント原理

蘆田慶治 略歴

1867 年 10 月 23 日 丹波氷上に生
1888 年 ランバスから受洗
1889 年 関西学院神学部入学
1898 年～ ヴァンダビルト、イエールに留学 M.A.
1902 年～ 関西学院で神学教授
1910 年 同志社大学神学科教授
～1932 年 停年
1932 年 『ロマ書講解』の自宅研究会
1936 年 下鴨の自宅で死去
(1941 年(S16)『神のことばの神学』邦訳刊行)
(『ロマ書講解』は未完に留まる)

大塚節治 略歴

1887 年 3 月 3 日 広島にて生
1903 年 同志社普通学校入学
1905 年 日野真澄より受洗、同志社教会
1909 年 4 月 神学校入学
1912 年～
～1915 年 ユニオン神学校、コロンビアで神学・倫理学を学ぶ。 B.D., M.A.
1915 年～ 神学部助教授
1919 年 神学部教授
1957 年 停年
1971 年 『キリスト教要義』(84 歳の時)
1977 年 『回顧七十七年』上梓(650 頁)(杉井六郎・竹中正夫編集)
1977 年 死去

『基督教研究』1923 年発刊

(2020 年最新号は第 82 巻)

1)第 1 巻 1 号、1923 年

蘆田慶治「発刊の辞」

「二つの重要な事柄」

「その一は、我国基督者の宗教経験に基づいた思想的表現としての神学の出現すること。…
宗教開始以来まだ約半世紀の経験にすぎないのではなるが、基督教にも、そろそろわが国人
特有の創意的な、基督教経験の発露としての神学が出来なければならぬ筈である。…只

だその努力だけはせねばならぬと感じて居る。・・・**重要な事柄の第二は**、基督教に就いての学的知識を広く世に普及することである。・・・今日の学者等が、今日の人として、基督教に就いてのもっと深い研究や思索や、とにかく、泰西学者などの精根こめて作り上げたものを広く我国で紹介する必要がある。」

「その一」→A

「重要な事柄の第二」→B

2)第 10 卷 1-2 号 1932 年

蘆田慶治『『基督教研究』発刊第十周年を迎えて』

(B) 「最初の対世間的抱負は、一には世界における広義での神学知識、及び之に関係ある思想的諸動向を世に紹介することであった。・・・精確な、ガッチリした基督教学的知識の普及ということには、達成の見込が大体に於て立っている。」

(A) 「今一つの抱負=われらの箇性、われらの信念を通してのみ始めて確立せらるべき神学の発表、否な太い神学思想的線を描くということに就いては、これまでの業績を顧みて、**衷心忸怩たらざるを得ないものがある**。・・・様々な理由がある。一は、事がら其自体が非常に重大で、過去幾世期を重ねた欧州新教国にですら、まだ吾等にとって満足達意な神学が纏まっては居ないほどであり、又た之に当らむとする吾等が、未だ甚だ微力であり又た研究練想を専念するほどの余裕を与えられず或は見いだし得なかった、と云ふような事もある。・・・失望すべき理由はない。已往は是れ好個の準備時代であったのだ。」

3)第 15 卷 1-2 号 1937 年

「晩年に於ける蘆田先生の翻訳事業」(松尾相) in: 「バルト著『ロマ書講解』未完訳稿の一部」(蘆田慶治)

「みな先生の真理に対しての熱意からであったことを思います」

「自分は過去の神学から悔い改めたと仰って」いた。

3)『基督教研究』第 20 卷、1 号、1942 年 12 月(S17)

「回顧と展望」(大塚節治)

(A) 「その一つは『我国基督者の宗教経験に基いた思想的表現としての神学の出現することである』。(B) その二は『基督教に就ての学的知識を広く世に普及することである』。(A) 前者は今日頻りに要求されて居る処の日本基督教神学の樹立であり、(B) 後者は其基礎的意味を有つ神学研究の普及と其深化向上である。」

(A) 「率直に言えば第一の課題については遺憾乍らまだ見るべき成果を挙げたとは想われない。我らは今尚**産みの苦しみ**にある。」

(A) 「元来、日本的基督教と言はるべきものは**作意によって出来るものではなく、寧ろ自然に産るもの**である。従って相当の年月を経て始めて成るものである。尤もプロテスタント教渡来この方、既に約八十余年を経過して居るがゆえに最早や啓蒙期を過ぎて日本独特の

神学が出てよい時ではある。・・・併しこれ等の人々の体験を学的に表現することは決して容易なことではない。蓋し・・・それを反省し分析して学的に表現しようとすれば却って其統一を破壊し其内に包蔵された矛盾と対立の可能性を鋭くせしめることなしとしない・・・。安価なる接合は徒に識者の笑を買うに終わるであらう。加之、過去二十年來の世界神学の動向は、長く結合し來った福音と文化との結合を切離し、基督教の独自性を一層鮮明ならしめた。かかる事情の下に於ける今日、基督教信仰の日本化又は日本的表現の困難は到底、明治時代のそれに比すべくもない。」(2頁)

(B)「本誌刊行の第二の目的は神学的知識の普及にあった。だがそれは明治時代に於ける通俗的啓蒙運動とは異なり『研究』を目ざせる者であった。されば、『泰西学者の精根こめて作り上げたものを広く我国に紹介する』ことであると共に、泰西学者の如くに聖書や教父や改革者の原典研究をも目ざしたのである。」

(B)「少くともこの方面に於て我が神学界に刺激を与え其水準を高めたことは事実である」

4)第30巻1-2号、1957年7月

大下角一「挨拶」

(A)「宣教百年を迎える日本の教会にとって、日本固有の神学の建設こそ望むべくして得難きものであります。」

「同志社大学設立の旨意」(1888年11月)

「ただ上帝を信じ、真理を愛し、人情を敦くする」

「一国の青年を導いて、偏僻の模型中に入れ、偏僻の人物を養成」してはいけない。

「天真爛漫として、自由の内自ずから秩序を得、不羈の内自ずから裁制あり、即ち独自一個の見識を備え、仰いで天に愧じず、俯して地に愧じず、自ら自個の手腕を勞して、自個の運命を作為するがごとき人物」の養成を！

新島襄 1889年の生徒への手紙から

「深山大沢、龍蛇を生ず」

→ 「深山大沢」という妨げるものなく自由に動き回れる環境の中で、「龍蛇を生」じさせる試みを！